



がん以外の疾患でも 活躍する放射線治療



放射線治療科 医長
朝生 智之
あさお ともゆき

放射線治療は主にがんに対して行われる治療法ですが、その他の病気に對しても有用な場面があります。今回は、それらの中でも比較的身近なものを紹介します。

一つ目はケロイド。皮膚の傷痕が固く盛り上がる疾患です。手術の痕やピアスを開けた穴にできる例が多いです。見た目の変化に加えて、かゆみや痛みを伴ったり、取り除いても再発する場合があります。そういった手強いケロイドの再発を防ぐため、固くなった部分を手術で切り取った後（当院では手術と同日）に放射線照射を行います。平日3〜4日間の通院治療で、手術部分の皮膚に限定して放射線を当てます。主な副作用は一時的な皮膚炎（日焼けのような変化）です。

二つ目は甲状腺眼症。眼球が収まっている部分（眼窩）の炎症によって、視え方の異常・眼球の突出・目の痛みなどを生じます。主に甲状腺

の病気に関連して現れますが、甲状腺機能が正常でも免疫系の異常で起こることがあります。

中等度から重症の場合に、症状を和らげる目的の放射線治療が選択肢に挙げられます。左右から眼窩を挟み込むように放射線を当てる、平日10日間の治療です。副作用として結膜炎・角膜炎などが起きますが、ほとんどは軽症です。また眼のレンズ（水晶体）に照射されると後に白内障を生じますので、可能な限りレンズを避ける工夫をします。発症した場合も眼科手術で治療可能です。



割り箸問題とプラスチック問題



静岡県立農林環境専門職大学
短期大学部 教授
三井 勝也
みつい かつや

30年ほど前、「割り箸問題」が世間で話題になっていたことを覚えている方も少なくないと思います。「割り箸は使い捨てだから環境に悪い」「割り箸を使うと森林破壊が生じる」などといわれ、外食産業においては、割り箸からプラスチック製箸に変更されたり、外食時には「マイ箸を持参しよう」という運動が起こったりしました。いつしか、この運動も下火になり、「割り箸利用が森林破壊を起こす」などという考え方はなくなっていきました。実際に割り箸の多くは、間伐材や製材時の端材を利用して作られている環境にやさしい製品なのです。

一方、10年前の2015年、1枚のセンサーシヨナルな写真が世界中で報道されました。覚えていた方も多く多いと思いますが、ウミガメの鼻にプラスチックストローが刺さった写真です。この一枚の写真をきっかけに「分解しないプラスチックは環境に悪い」となりました。そこから、「プラスチック

を使うことが環境に悪い」という風潮になった気がします。果たして、そうなのでしょうか。

多くのプラスチック製品は石油由来ですが、自由に成型できるだけでなく、原料の成分を変えることによってさまざまな特性を持たせることができる非常に便利なものです。また、衛生面でも優れた材料であり、多くの医療品にも使われるほどです。

海洋に流れ出た「プラスチック」が悪いのではなく、プラスチックを「海洋に投棄したこと」が悪いのです。割り箸もプラスチック製品も、作る側、使う側のモラルの問題なのではないでしょうか。

